

第2章 現況分析

①地域の歴史・動向



国指定重要文化財
「高松城 北之丸見櫓・渡櫓・水手御門」

①日本三大水城のひとつである 高松城を中心とした城下町と文化土壌の形成

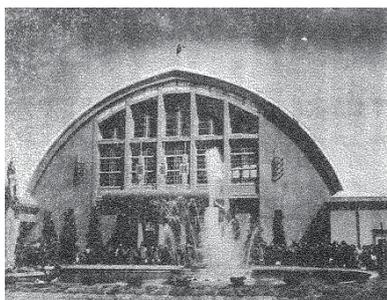
- 天正16年 | 豊臣秀吉の家臣生駒親正（いこま ちかまさ）による高松城築城／生駒家による城下町の整備／高松松平家による城下町の拡大と産業振興
- ・北は瀬戸内海に面し、三重の堀に囲まれた水城、その南側に城下町の広がりを見せる、海に開かれた都市の形成
 - ・高松城の大手門門前に開かれた城下町には、丸亀町を始めとする商人町や職人町などが形成される
 - ・栗林公園や法然寺などの歴史遺産が造られたほか、茶道、華道、俳諧など文化も発展し、産業奨励策により、漆芸、保多織、理平焼、桐下駄、円座、提灯、松盆栽、張子、獅子頭などのものづくりが盛んになる

②明治から昭和初期の動向

- 明治23年 | 香川県の県庁所在地として、全国で40番目の市となる
- 明治27年 | 色を変えない松の緑に市の悠久繁栄を祈念して、市章を制定
- 明治31年 | 全国で3番目の工芸学校として「香川県工芸学校」(現、香川県立高松工芸高等学校)を設立
- ・江戸時代末期に玉椿象谷（たまかじぞうこく）によって発展した香川漆芸の伝承
- 明治43年 | 宇野駅と高松駅を結ぶ宇高連絡船の就航
- [四国の玄関として、国の出先機関や日本銀行の支店を始め、日本を代表する企業の支店が]
集積する地方都市として発展
- 大正時代 | 高松市出身の菊池寛が小説家として活躍
- ・『父帰る』『恩讐の彼方に』『真珠夫人』等の代表作を発表
- 昭和初期 | 雑誌『文藝春秋』の創刊、芥川賞・直木賞の制定等、実業家としても活躍
- 昭和3年 | 高松市主催による全国産業博覧会を開催
- ・出品総数約15万件、入場者数約48万7千人を集める
- 昭和9年 | 瀬戸内海が、雲仙や霧島とともに我が国で初めての国立公園の一つ（瀬戸内海国立公園）として指定される
- ・明治維新直後に瀬戸内海を訪れた地理学者リヒトホーフェンは「支那旅行日記」の中で、「これ以上のものは世界のどこにもないであろう」と世界中に瀬戸内海を紹介

③戦後から昭和後期の動向

- 昭和24年 観光高松大博覧会開催
・2か月の期間中に約57万人が訪れ、戦災からいち早く立ち直った
「国産館」は後に市立体育館として活用され、「科学館」は全国初の公立美術館（設計：山口文象）として栗林公園内に開館
- 昭和25年 | 「デザイン知事」と呼ばれた金子正則県知事が、庁内にデザイン室を設置
昭和49年 | ・地域振興や文化振興などにおけるデザイン戦略を研究し、丹下健三を始めとする著名な建築家に建築設計を依頼
- 昭和28年 第8回国民体育大会（四国国体）
- 昭和30年 音丸耕堂（高松市出身）が彫漆の分野で、人間国宝に認定される
- 昭和31年 イサム・ノグチが初めて牟礼町を訪れる
・庵治石とその産地の風土を気に入り、制作に励む
・牟礼町のアトリエはその後、「イサム・ノグチ庭園美術館」（平成11年開館）として公開
- 昭和36年 磯井如真（高松市出身）が蒔醤の分野で、人間国宝に認定される
- 昭和36年 高松市民会館落成
アメリカのセント・ピーターズバーグ市と姉妹都市提携
- 昭和38年 | 流政之が提唱した「讃岐民具連（さぬきみんぐれん）」の設立・活動
・民衆が日常の生活用具として使い続けてきた様々な民具を、より洗練された新しい造形として再生しようという運動
・メンバーには地元の作り手のほか、ジョージ・ナカシマも名を連ね、同時期には丹下健三、猪熊弦一郎やイサム・ノグチが高松でも活躍
- 昭和41年 滋賀県彦根市と姉妹都市提携
- 昭和48年 鎌倉芳太郎（香川県出身）が型絵染の分野で、人間国宝に認定される
- 昭和49年 茨城県水戸市と親善都市提携
- 昭和51年 「香川漆器」が国の伝統的工芸品の指定を受ける
- 昭和53年 | 大平正芳（香川県出身）が内閣総理大臣に就任する
・「田園都市構想」の中で、多様性のある地域主導の国家建設と、文化の時代の到来を唱える
- 昭和55年
- 昭和58年 市の木を「黒松」に、市の花を「つつじ」に制定
- 昭和60年 磯井正美（高松市出身）が蒔醤の分野で、人間国宝に認定される
- 昭和61年 高松市総合体育館落成



観光高松大博覧会
(写真は後に市立体育館となる国産館)



イサム・ノグチ庭園美術館
(写真提供 公益財団法人イサム・ノグチ日本財団)

④最近の動向

- 昭和63年 瀬戸大橋開通
- ・一方で宇高連絡船が廃止されるなど、瀬戸内海とつながった港町らしさが消失しているという声もある
- 高松市美術館が移転新装オープン（紺屋町）
フランスのトゥール市と姉妹都市提携
- 平成元年 新高松空港開港
- 平成2年 中国の南昌市と友好都市提携
- 平成4年 高松～ソウル便の就航
- サンクリスタル高松（高松市図書館、菊池寛記念館、高松市歴史資料館）が開館
- 平成5年 第48回国民体育大会開催（東四国国体）
- 平成6年 太田儔（岡山県出身、高松市在住）が蒟醬さんまの分野で、人間国宝に認定される
- 平成11年 高松市が中核市へ移行
- 平成12年 瀬戸内海に面する北浜町の古い倉庫群をリノベーション*した複合商業施設「北浜アリー」オープン
- ・週末には多くの若者が集い、港の雰囲気味わえる場所
- 平成15年 高松自動車の全面開通（徳島県鳴門市～愛媛県四国中央市）
- 平成16年 サンポート高松グランドオープン、文化芸術ホール（愛称：サンポートホール高松）開館
- ・瀬戸内海に臨む高松市のシンボルゾーンとして、また、新しい都市文化の創造拠点として、「魅力にあふれ、人が輝く創造都市」の実現に寄与している。
- 平成17,18年 高松市と塩江町、牟礼町、庵治町、香川町、香南町、国分寺町が合併
- 平成17年 源平史跡のライトアップと石あかり（石でできた照明器具）を設置した「むれ源平石あかりロード」を開催・継続
- 平成18年 「高松丸亀町壱番街」がオープン（その後、平成22年に「高松丸亀町貳番街」及び「高松丸亀町参番街」、24年には「丸亀町グリーン」が順次オープン）
- ・「人が住み、人が集うまち」を目指して中心市街地の再開発に取り組み、通行量は回復傾向にある
- 「さめき映画祭」の開催
- ・香川県を舞台とした映像企画の発掘
- 「第1回高松国際ピアノコンクール」の開催
- ・若いピアニストの発掘・育成が目的



トゥール市と姉妹都市提携



高松丸亀町壱番街

- 平成21年 | イタリアのレッジョ・エミリア市^{*}で取り組まれている幼児教育を応用した、アーティストが保育所を訪問・滞在する「保育所への芸術士派遣事業」の実施
- 平成22年 「瀬戸内国際芸術祭2010」の開催
- ・瀬戸内海の島々の伝統文化や美しい自然を生かした現代美術を通して、瀬戸内海の魅力を世界に向けて発信
 - ・女木島、男木島、大島、直島（直島町）など7島と高松港周辺の会場に約94万人が来場し、約111億円の経済波及効果
- 「第2回高松国際ピアノコンクール」の開催
- 「第1回サンポート高松トライアスロン～瀬戸内国際体育祭～」の開催（以降毎年開催）
- 平成23年 国内では初めてとなる「アジア太平洋盆栽水石高松大会」の開催
- ・国内だけでなくアメリカ、イギリス、中国などから、4日間で延べ約7万6千人が来場
- 高松～上海便の就航
- 平成24年 海と島と街を巡るクラフトフェア^{*}「瀬戸内生活工芸祭」の開催
- ・玉藻公園と女木島を会場に、2日間で1万人以上が来場
- 「100年サーカス（瀬戸内サーカスファクトリー）」の開催
- 平成25年 高松～台北便の就航
- ・ソウル、上海も含めたアジア主要都市との交流が一段と進展することが期待されている
- 「瀬戸内国際芸術祭2013」の開催
- ・新たに5つの島が加わる（沙弥島^{しゃみや}（坂出市）、本島（丸亀市）、高見島（多度津町）、栗島（三豊市）、伊吹島（観音寺市））
- 山下義人（高松市出身）が蒟醬^{しんま}の分野で、人間国宝に認定される
- 「第4回古代山城サミット高松大会」の開催



アジア太平洋盆栽水石高松大会



高松空港



瀬戸内国際芸術祭
大巻伸嗣「Liminal Air -core-」
Photo:Yasushi Ichikawa

平成26年 「第3回高松国際ピアノコンクール」の開催
「第4回日仏自治体交流会議」の開催
・過去最高となる45自治体の首長ら約160名が参加



第4回日仏自治体交流会議

平成27年 コトデン瓦町ビルに瓦町FLAGが開業
高松市美術館リニューアルオープン



市美術館リニューアル後

平成28年 「屋嶋城跡城門遺構」がオープン
G7香川・高松情報通信大臣会合
「瀬戸内国際芸術祭2016」の開催
高松～香港便の就航
「たかまつミライエ」がオープン
・こども未来館を中心に、夢みらい図書館、
平和祈念館、男女共同参画センターを併設



屋嶋城



G7香川・高松情報通信大臣会合



たかまつミライエ

平成29年 屋島競技場（愛称：屋島レクザムフィールド）が
リニューアルオープン
台湾の基隆市と交流協定締結
有料道路であった屋島ドライブウェイが無料化



屋島レクザムフィールド



基隆市（台湾）と交流協定締結

男木島の5年間の変化

男木島は、高松港から北に約10kmの距離に位置する面積1.38km²、周囲5.0km、人口が約180人の島です。平坦地が少なく南西部の斜面に階段状に集落が作られています。

男木島の教育機関である男木小・中学校は、明治17年の開校以来、平成29年に133年目を迎えた伝統校で、ピーク時には小中あわせて257名の児童生徒が在籍していました。その後、少子化や過疎化などにより、小学校は平成20年度から、中学校は23年度から休校となっていた中、「瀬戸内国際芸術祭」の開催が契機となり、島への移住者が増加を始め、26年4月に男木小学校・男木中学校が再開し、28年5月には男木保育所が再開しました。

このように、芸術の力がもたらした男木島での「再生の物語」は、創造都市の理念である「市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、グローバル*な環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決に取り組む」を体現したものであるとして、本市の創造都市推進における重要なモデルの一つとして位置付けていきます。



男木島全体の様子



男木小・中学校再開式



男木交流館 ジャウメ・プレンス「男木島の魂」

古くて新しいまち仏生山

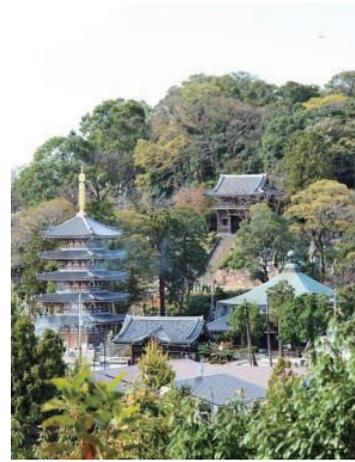
仏生山エリアは本市中部に位置し、1670年（寛文10年）に初代高松藩主である松平頼重が、生福寺を法然寺と改名し、高松松平家の菩提寺としました。このことが仏生山町の名前の由来となるとともに、仏生山は門前町として栄えるようになりました。

「お成り街道」とも呼ばれる本町通りを中心に、江戸から昭和の面影を残す町屋や寺院が残り、現在では、仏生山歴史街道景観形成重点地区*として、町屋の外観をいかした店舗利用など、歴史的な地域資源の活用が進められています。

その一つに、「お成り街道」を中心に点在するお店や施設では、宿泊所、食堂、浴場などまち全体で「旅館」の機能を担おうとする、取組が行われています。夜は近くの食堂でごはんを食べて、公益財団法人日本デザイン振興会が実施するグッドデザイン賞（建築・環境デザイン部門）を受賞した仏生山温泉を大浴場として利用します。

その他にも、仏生山の裏道や水道などを巡りながら、土地の暮らしや物語を体験する参加型の演劇とまちあるきを掛け合わせた演劇まちあるき「パラダイス仏生山」が、連合自治会や婦人会、商工振興会などと連携して開催され、演劇の中には10名以上の地元市民も参加しました。

このように仏生山地区では、豊かな歴史・伝統・文化を持ちながらも、新規事業の実施や新たなプレイヤーへの支援が積極的に取り組まれている、住民主体の創造的なまちづくりが行われています。



法然寺



お成り街道



仏生山温泉



パラダイス仏生山
写真：坂口祐（物語を届けるしごと）

②都市の創造性・持続性から見る本市の現状

区分	現状
①創造的人材	瀬戸内国際芸術祭やそのボランティアサポーター「こえび隊」への参加、保育所などへの芸術士派遣事業等を機に、本市周辺にUターン*する芸術家等は増加傾向にあると言われています。
②生活の質	文化芸術に係る資源やイベントは多数あります。また、本市の1世帯当たり1か月間の教育娯楽への消費支出割合は約9.6%となり、四国平均の約8.6%を上回っています（総務省統計局「家計調査」、平成28年）。
③創造産業*	創造的職種（ソフトウェア業・デザイン業・土木建築サービス業・写真業・専門料理店・教養・技能教授業）の従業者数は全国の地方圏平均より依然高く、ソフトウェア業・デザイン業・専門料理店の従業者数の割合は近年上昇しています（総務省「創造的人材の定住・交流に向けた事例報告書」、平成24年及び経済産業省「平成26年経済センサス基礎調査」）。
④創造支援・*インフラストラクチャ	高松市美術館が平成28年3月にリニューアルオープンし、11月には複合施設である「たかまつミライエ」がオープンしました。香川大学では、新たに「デザイン思考」や「リスクマネジメント」の能力育成を取り入れた「創造工学部」が30年度から新設されます。
⑤文化遺産と文化資本	屋島や高松松平家の歴史文化を中心に指定文化財は163（国53、県41、市69）、登録文化財は115（国103、市12）と多く（平成29年12月現在）、近年ではユニークベニューとして、重要文化財指定の披雲閣が会議や晴れの日で活用されており、また、現地学習会である「ふるさと探訪」の実施や屋嶋城 <small>やまのき</small> の一般公開など、文化財の活用に取り組んでいます。
⑥市民の活動力	NPOの活動状態、行政分野への女性の参画
市民活動団体の活動は活発であり、平成18年度からは市民活動団体等と本市が協働のパートナーとして社会的・公益的な課題に取り組む「高松市協働企画提案事業」も実施されています。本市の審議会等においては、約4割の女性委員が就任しています。	
⑦創造的ガバナンス*	都市行政への能動的な市民参加とパートナーシップ、政策立案能力、財政自立、文化予算
平成24年から高松市創造都市推進懇談会（通称：U-40）を設置し、本市が創造性をいかしたまちづくりを推進するに当たり、各方面で活躍している若い世代の意見を聴取しています。	